



「蠢く図書館」

熊谷 和香子

「図書館って、ざわざわしている。」

初めてそう感じたのは、小学生の時だ。地元の市立図書館のしーんと静まり返った児童書コーナーで、その日借りる本を選びながら、である。誤解のないように言っておくが、この「ざわざわ」は、音ではない。昔の図書館職員は今よりずっと怖かった（ような気がする）から、児童書コーナーといえども、それはそれは静かだったのだ。自分が本棚の間を歩く音だけがコツンコツンと響くような空間で、音ではない「ざわざわ」を感じた。

私が感じたのは、たぶん何かの「気配」だ。児童文学にどっぷり浸かった子供だったから、何でもファンタジーの世界に結びつけて擬人化する傾向が強かったのかもしれない。このズラリと並んだ本たち、さらにその中にぎっしり詰まった文字たちが、誰もいない夜の図書館で動き出したらとんでもない大騒ぎになる！そんな想像をしてしまったのだ。今、澄ましたように整然と並んでいる本たちは、実は息を潜めている。自分の中に綴られた物語を語りたくてうずうずしている。まだ知らない物語が、言葉たちが、手に取ってもらえるのを今か今かと待っている！……こう感じた時から、私にとって図書館は「静かな」空間ではなくなった。

大人になり、図書館で働くようになった。さすがにファンタジーの世界は卒業したが、あの時感じた図書館の「ざわざわ」を、子供じみた空想だったと過去のものにすることが未だにできないでいる。いやむしろ、大学図書館で毎日過ごすようになって、背後に感じる「ざわざわ」は、日に日に大きくなっている気がするのである。世界中で日々進められるさまざまな分野の研究。日々蓄積され、更新されていく学術情報。それらに出会うことができる大学図書館。ざわざわざわざわ、もう止まらない。

図書館は「知の気配」で蠢いている。まだあなたが出会っていない「知」が、息を潜ませて待っている。さあ、学生さんたち、図書館へようこそ。